

埼玉県知事 上田 清司



埼玉第九合唱団第61回演奏会が盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げます。埼玉第九合唱団におかれましては、今年、合唱団創立30周年を迎えられ、県内の音楽文化の発展のため、ますます活発に活動を展開されております。皆様方の意欲的な活動に対しまして、深く敬意を表する次第です。

埼玉県は、豊かな自然に恵まれ、多くの歴史や文化資源があり、各地域で多彩な文化活動が展開されております。本県といたしましても、県民の皆様方が自ら文化を創造し、発表する場づくりに努めるなど、芸術文化の振興に積極的に取り組んでおります。引き続き、本県の文化行政の推進により一層の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本公演の御成功と埼玉第九合唱団の限りない御発展を心から祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

埼玉第九合唱団 団長 新祖 章



本日は、ご多用のところ埼玉第九合唱団第61回演奏会にご来場くださりましてありがとうございます。

当団は1973年に結成されて以来、今年で30周年を迎え、今夏には創立30周年記念演奏会を盛会裡に開催することができました。日ごろからの皆様の温かいご支援に改めて感謝申し上げます。この間、暮れの第九公演と夏の自主公演という年2回の演奏会を欠かさず開催し、第九公演も今回で31回目となります。第九公演は、これまですべてプロのオーケストラと共演してまいりましたが、今回は初めてアマチュアオーケストラとの共演で行います。地元のアマチュアオーケストラとして活躍する埼玉中央フィルハーモニーオーケストラとは、ともに宮寺勇氏を指揮者とする関係から部分的な交流はありましたが、本格的な共演はこれも今回が初めてというものです。

彩の国の合唱団とオーケストラが贈る歓びの歌！さて、どんな演奏となるでしょうか。ご期待ください。

埼玉中央フィルハーモニーオーケストラ 団長 吉田 信光



本日は埼玉第九合唱団と埼玉中央フィルとの合同演奏会にご来場下さしまして団員一同心から喜んでおります。ベートーヴェンの最高の曲をここ大宮ソニックシティで演奏出来ますのは、指揮者宮寺勇先生と埼玉第九合唱団の方々のお力添えの賜物と深く感謝し身の震える思いでございます。音楽の原点は人間の声・歌にあることは疑う余地もありません。人の声は喜怒哀楽如何様にも繊細に変化します。他の楽器では及ばない表現の極みです。音符と表情が一杯に詰った胸郭から響いてくる音楽には何とも言い様のないものがあります。交響曲第九番「合唱付」を演奏していると、合唱・独唱の表情に楽器群は圧倒されます。ベートーヴェンは交響曲第九番で人間の声の音楽性が如何に優れているかを表現したのだと思います。そしてこの最高の歌唱表現の中で楽器を奏する事、これ以上の至福はございません。皆様と共にこの至福の時を過ごす事を願ってご挨拶に代える次第でございます。本日はご来場誠にありがとうございました。

埼玉第九合唱団

1973年に埼玉県民の手でベートーヴェンの『第九』を演奏することを目的に結成され、今年で30周年を迎える。この間、夏期は合唱団の主催により古典から現代までの様々な合唱曲に取り組み、年末にはオーケストラとの共催で『第九』演奏会を開いており、同一の合唱団における『第九』の演奏記録としては、全国でもめずらしいものになっている。

近年は常時160名以上の団員を擁し、県内最大の合唱団として、各種音楽祭、イベントにも参加。1994年、オーストラリアのブリスベンで開催されたワラナ祭に県の文化使節として出演。1998年、創立25周年記念として、本県ゆかりの宮澤章二、鈴木憲夫両氏の作詞、作曲による委嘱曲、オーケストラと混声合唱のためのカンタータ「さいたまさちあり」を演奏。そして2002年FIFAワールドカップ日韓共同開催記念公演として、2000年11月には韓国のソウル市世宗文化会館において、2001年12月には大宮ソニックシティにて、ソウル・ナショナル・シンフォニー・オーケストラとの共演による演奏会を開催し、好評を博す。この双方での公演行事に対しては、埼玉県知事より感謝状をいただいた。

毎月6～7回の定期練習と年数回の日曜練習を行い、新たなチャレンジを続けながらこれからも質の高い合唱音楽を目指して活動していく。

ホームページ(団員を募集しています) <http://homepage2.nifty.com/saitamadaiku/>
メールアドレス saitamadaiku@nifty.com

指導者

正指揮者／宮寺 勇 正伴奏者／田尻 桂 副指揮者／代田 芳文 副伴奏者／高宮 洋平

ソプラノ

青木紀子	浅利信子	芦田靖子	新井敦子	池頭由美子	今泉祥子	臼井礼子	鶴沼美津子
江川郁江	遠藤綾子	大串清子	大崎真由美	大島君江	大平恵美子	小沢愛子	小武内英子
折原セツ子	加藤富士子	金澤由布子	蚊野千枝	岸 照子	北川玲子	久保 栄	久保山恵美
熊井戸正子	桑田優子	近内満知子	坂本和枝	佐藤高子	佐藤恭代	白木百合子	鈴木洋子
須藤 知	滝上貴美代	田口静子	竹下実岐	塚原宏子	中村節子	中村まさみ	縄田庸子
西間木八千穂	野本直子	肥島麻理	白田香澄	長谷部芳子	秦 英子	林 昌枝	原田レイ子
星野雅代	堀江君江	幕田多賀子	松岡久美子	松本恵美	宮石カヨ子	宮崎久子	宮田励子
村上綾子	村田紀子	望月和江	森 修子	矢萩路子	山田理恵	山戸敏子	吉田 慧
和田真理子	渡辺節子						

アルト

赤田孝子	阿部真澄	新井悦子	安藤景子	池田晃子	伊沢澄子	石川久代	石田浩子
岩崎美智子	宇佐美靖子	大井 睦	大沢英子	太田淑子	小笠原記公子	岡野あい子	小椋栄子
小野寺鈴江	柿崎ムツミ	春日智子	小池栄子	近藤佐恵子	佐々木智恵子	佐藤道子	佐藤美代
真田美佐子	渋谷みどり	清水千砂	下崎由美子	杉原みどり	鈴木文江	平良温子	高亀美子
高橋素子	田中八重子	田保京子	千野満寿実	築紫マエ子	中島 郁	中野と志子	中村瑞恵
中村 姚	名倉邦子	西川富紀子	林富士子	細村雅子	宮崎和子	宮崎裕子	目黒靖子
森 和代	八木橋弘子	矢島和子	山田祺世子	横田百合子	吉野久江	吉見順子	吉見ミチ子
和田順子	和田智子						

テノール

朝日 明	新井欽朔	飯塚 裕	生駒 孝	今村正道	鹿島斗鬼男	加藤省吾	久保田謙治
駒形一夫	斉藤正人	坂本宗男	佐藤鉄男	島野光男	新祖 章	高橋 浩	田中照記
中荃幸正	中村秀樹	林 昭宏	星野英明	前田拓志	三村隆男	三宅朝昭	山影哲郎
百崎直也	横田正利	若林祥文					

バス

青柳輝和	五十嵐友厚	石川秀雄	榎本法夫	大崎裕久	大島誠一郎	可知利道	萱島治雄
川上泰夫	菊池皓一	草谷六雄	島原信行	志村忠雄	大門 力	武内久明	田島康治
田中吉晴	西岡章彦	西川裕二	蓮見 寛	原 伸一	平野正雄	落谷庄平	前田康秀
馬淵 襄	丸山文夫	森久保康弘	安本秀を	渡邊 清			

埼玉中央フィルハーモニーオーケストラ

1996年1月設立。団員は中学生から70歳と幅広く、活動団員数は80名前後で県下でも有数規模のアマチュアオーケストラ。常任指揮者は宮寺勇氏。主に蓮田市・久喜市を中心に活動。設立の翌年から毎年、久喜総合文化会館で定期演奏会を開催。この間ベートーヴェンの交響曲第7番、8番、9番(蓮田市制30周年記念コンサート)、ブラームスの交響曲第1番、2番、ショスタコーヴィッチの交響曲第5番、等を演奏。また第3回演奏会では、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターの平澤仁氏をソリストに招き、メンデルスゾーンのコンチェルトを共演。定期以外では、蓮田市音楽祭に毎年参加。98年には、市音楽連盟合唱団と美しく碧きドナウ等を共演。他、さいたま市音楽祭おのみや、彩の国県民芸術文化祭などに出演。地域に根ざした活動も積極的に行い、この間蓮田市内の小学校での演奏会を数回行なう他、アンサンブル形式での老人施設等での演奏、久喜市図書館での名曲と朗読の集いで演奏などを継続的に続けている。来年2月には秋父混声合唱団との共演、また5月29日には、第8回定期演奏会でチャイコフスキーの交響曲第6番等の演奏を予定している。

ホームページ(団員を募集しています) <http://orchestra.musicinfo.co.jp/~scpo/>
メールアドレス KCHYsakura@aol.com

コンサートマスター

井口諭司 大守美由紀

1stヴァイオリン

井口諭司 加藤美菜子 北村滯子 坂田幸江 田沼博子 長島りさ 新実恵美子 浜辺若菜
北條裕明 朴英毅 渡辺聖子 *白木忠臣

2ndヴァイオリン

大守美由紀 小和田厚地子 尾崎俊一 近野基雄 腰塚芳子 高浦秀明 高見澤修 田中綾子
土田洋一 野田佳子 森正泰弘 吉田信光

ヴィオラ

谷田仁行 内山亜紀 小見聡 神山有紀子 竹澤和子 堀江弘隆 松井真佐美 宮内千恵
山本洋子 渡辺健司

チェロ

中村洋一 浅賀喜三雄 新井孝之 井利順一 齋藤木綿子 代田芳文 *阿形有佳 *中川友征
*山中彰人

コントラバス

小野充善 榎本裕子 篠原剛之 平渡圭樹 箕田文夫 吉田昌之

フルート/ピッコロ

齋藤龍大 井上純子 川野美代子 小林雅子 関口亮子 立石晃子 松本光司 三田美和

オーボエ

ファゴット/コントラファゴット

島田啓子 高草木朗子 堀部まなぶ 横井寿江 菊池丈海 篠井江利子 松本学 宮崎恭世

ホルン

堀口芳雄 榎本直子 金子かおる 櫻井公人 四ツ谷剛

トロンボーン

若山伸幸 朝倉健 新井由花 飯泉悟 小泉信介 田村文孝

チューバ

トランペット

垣沼知洋 伊藤英明 高草木尚 若山友子 成田睦 酒井久美 西納裕 *吉崎智之

パーカッション

(* 賛助出演者)



宮寺 勇 指揮者

指揮をヘルムート・リリング、佐藤功太郎、牧野統各氏に師事。

1983年から埼玉第九合唱団の正指揮者。熱意と的確な指揮で大人数のアマチュア合唱団を育て、フォーレ「レクイエム」、J・S・バッハ「ミサ曲口短調」、ドヴォルザーク「スタバト・マーテル」、ベートーヴェン「交響曲第九番」「ミサ・ソレムニス」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」など数多くの名曲を演奏し、好評を博している。1995年、日本人として初めてルーマニア・ブカレストフィルの定期を指揮し、高い評価を得る。また、ワールドカップ日韓共催を記念し、2000年11月には韓国ソウルにてソウル・ナショナル・シンフォニー・オーケストラを指揮、翌2001年12月には同オーケストラの日本への招へいに際し、当大ホールにおいて第九を指揮し好評を博す。

埼玉中央フィルハーモニーオーケストラ常任指揮者。女声合唱団「悠」正指揮者。



渡海 千津子 ソプラノ

東京音楽大学音楽教育科卒業。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程修了。後に渡伊し、ミラノにてイタリア・オペラの研鑽を積む。

声楽を中村博之、川上洋司、田中奈美子、朝倉蒼生、M. レアーレ、F. アルバネーゼ、L. マルツァガリア、D. マッツォーラ、白石敬子、柿沼伸美の各氏に師事。

歌曲やオペラ、室内楽、各種楽器とのコラボレーションなど、幅広い演奏活動を行うほか、様々な形態でのソロ・コンサートを開催し好評を博す。

第13回全日本ソリストコンテスト優秀賞受賞。第78回二期会オペラ研修所コンサート出演。

現在、二期会オペラストゥーディオ研修生、ホール・オペラ・アカデミー、横浜シティオペラ各会員。



諸田 広美 アルト

群馬大学教育学部音楽科卒業後、1997～2001年の4年間イタリア・ミラノに留学。その間、ロータリー財団、群馬県、伊政府、安田生命文化財団から奨学金を得て、イタリア国立ミラノ・ヴェルディ音楽院修了。留学中に出演したオペラには、『フィガロの結婚』、『カヴァレリア・ルスティカーナ』、ヴォルフ・フェッターリ作曲『4人の頑固者』がある。帰国後、東京芸術大学大学院修士課程オペラ科に入学。現在3年生で、林康子氏に師事。

今年10月、大学院定期オペラ『フィガロの結婚』においてケルビーノを演じた。また、今月21日に上野音楽堂で行われる「台東区第九」でもアルト・ソロを務め、3月にはメノッティ作曲オペラ『霊媒』でパパを演じる。



加茂下 稔 テノール

武蔵野音楽大学卒業、同大学院修了。第24回イタリア声楽コンクール・テノール特賞受賞。第29回日伊声楽コンクール第5位入賞。第64回日本音楽コンクール第4位入選。

1987年より、イタリア、オーストリアに留学。オペラ『椿姫』『魔笛』等、ベートーヴェン「交響曲第九番」等のソリストとして、また、紀宮内親王殿下御前演奏など、国内外の各種演奏会で活躍しているほか、1999年以来毎年開いているリサイタルでは高い評価を得ている。

正統派ベル・カントのテノーレ・リリコ・レッツェーロとして、その美声は国内のみならず海外でも評価を得ており、今後益々の活躍が期待される。

武蔵野音楽大学および武蔵野高等学校声楽科講師。二期会会員。日本演奏連盟会員。



薮内 俊弥 バス

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程独唱科卒業。吉江忠男、多田羅迪夫各氏に師事。第12回日仏声楽コンクール第2位入賞。

オペラでは芸術大学院オペラ、モーツァルト『ドン・ジョバンニ』マゼット役、東京室内歌劇場公演サリエリ『ファルスタッフ』スレンダー、バイジェッロ『セヴィリアの理髪師』バルトロ役で出演、また、ブッチーニ『ジャンニ・スキッキ』タイトルロール、モーツァルト『フィガロの結婚』フィガロ、『コシファン・トゥッテ』グリエルモなどに出演。宗教曲などでは、第51回朝日新聞社主催「芸大メサイア」、台東区公演「交響曲第九番」のソリストをはじめ、バッハ「口短調ミサ」、「マタイ受難曲」などのソリストを務める。

歌劇『タンホイザー』序曲 ワグナー(1813-1883) 作曲

リヒャルト・ワグナーは、1813年5月、ドイツのライプツィヒに生まれた中期ロマン派を代表する音楽家であり、オペラ史上において楽劇(歌よりも音楽そのものに重点が置かれて構成されているのが特徴)の創始者としても大変有名である。またイタリアを代表するオペラ作曲家、ヴェルディと同年に誕生している。幼少からピアノを習い、また文学にも関心のあったワグナーは、14歳の時、ゲヴァントハウスでのベートーヴェンの作品演奏に触れ感動し、本格的に音楽の道を志すことになる。その後、18歳でライプツィヒ大学へ進学し、幾多の試練を乗り越え、『リエンツィ』『さまよえるオランダ人』とオペラを作曲していく。そして、ワグナー32歳(1845年)の時、初期の代表作であるオペラ『タンホイザー』を完成させる。本日演奏する『タ

ンホイザー』序曲は、三部形式になっており、このオペラのストーリー(敬虔で神聖な世界と官能的で快楽な世界との対立と葛藤)を序曲そのもので非常に凝縮して描写、表現している。曲はまず、ゆったりとしたテンポで管楽器群による敬虔な第3幕「巡礼の合唱」のテーマに始まる。そして弦楽器群が加わり、このテーマが何度も繰り返されながらスケールが拡大していき、次第に「巡礼の合唱」が遠ざかったあと、中間部、官能的な第1幕第1場「ヴェーヌスブルクの音楽」に突入していく。しばらくしてシンバルの強い一撃とともにテンポが急速、タンバリンが途中から入り、盛り上がったところで「巡礼の合唱」のテーマが再び奏され、壮大なクライマックスとともに曲は終結していく。

曲目紹介

交響曲第九番二短調(合唱付) 作品125 ベートーヴェン(1770-1827) 作曲

シラーの有名な頌歌「歓喜に寄す」の詩が発表された1790年代前半、青年ベートーヴェンはドイツのボン大学に聴講生として在籍していた。その頃、パリでは民衆が「フランス革命」に蜂起し、時代は「自由・平等・博愛」主義に沸き返っていた。そしてこの頃ベートーヴェンは、この時代精神を反映した運命的な詩に出会う。これこそが「神を讃え、自然に感謝し、人類はみなひとつである…」という内容の詩、フリードリッヒ・フォン・シラーの「歓喜に寄す」である。強く感銘を受けたベートーヴェンは、この詩に作曲をすと公言し、構想を練り始めたのであった。そして約30年かけ、何度となくこの詩に作曲を試みてきたのだが、具体的な最初のスケッチが開始されたのは1816年であり、「第九」が完成されたのが1824年と記録に残っている。ということは、実に8年をかけて完成したことになり、ましてやシラーの詩に出会った頃から考えると、実に30年以上も構想していたことになる。しかしベートーヴェンは、1818年から1822年にかけて、晩年の傑作といわれている「ミサ・ソレムニス」「三大ピアノソナタ」「ディアベリ変奏曲」といった大作に着手するようになり、「第九」どころではないという年月を過ごすことになる。1823年2月、「ミ

サ・ソレムニス」をようやく書き終え、前年の10月にロンドンのフィルハーモニック・ソサエティから交響曲の作曲依頼が届いていたということもあり、それに応えるため、本格的に「第九」のみに没頭した。作曲はスケッチ材料が豊富なこともあって比較的順調に進み、あのシラーの「歓喜に寄す」の頌歌を第4楽章で使用するというアイディアを思い立ち、1824年2月に作曲完了。こうして本格的に「第九」に取り組んでから約1年半、音楽史上最初の合唱付交響曲である「交響曲第九番二短調 作品125」が完成したのである。初演は1824年5月7日、ウィーンのケルトナートーア劇場において、ベートーヴェンとウムラウフ楽長の指揮により行なわれた。全く耳の間こえないベートーヴェンに代わって、実際の指揮はウムラウフが務めた。演奏は圧倒的な大成功を収め、会場は拍手の嵐に包まれた。しかし、耳の間こえないベートーヴェンはそのことに気付かず、聴衆に背を向けたまま呆然としていた。アルト歌手のウンガーがベートーヴェンの袖を引っ張り、熱狂する聴衆の方を見るように教えてあげたのは有名なエピソードである。

第1楽章 神秘的で空虚な完全5度の響きに始まり、動機が雷鳴のようにふりかかる。やがて強烈な第1主題が形成され、変口長調の素朴な第2主題へと展開する。

第2楽章 冒頭の弦とティンパニの強烈な序奏が印象的。スケルツォ。

第3楽章 最も美しく、幸福に満ち溢れたアダージョ。

第4楽章 冒頭、管楽器群による強烈な嵐に続き、第1楽章から第3楽章までのテーマが回想される。そしていよいよ歓喜の主題が奏され、感動的な雰囲気の中、バリトンのソロが登場する。独唱、四重唱、合唱で次々とシラーの頌歌が歌われていく。そして、有名な「歓喜の歌」、重厚な男声合唱、壮大な二重フーガ、四人の独唱者による甘美なカデンツと展開していき、最後は怒濤のプレスティッシモで興奮とともに最高の歓喜へと駆け上がり、会場全体が一体となり、幸福感を抱きながら感動とともにクライマックスを閉じる。